

園長先生の子育てひろば

令和5年11月

10月の子育て講演会から

園長 山中 文

10月に、本園で子育て講演会があり、相山女学園大学の伊藤博美教授に「非認知能力と認知能力の関係について—研究動向から見えてきたこと—」という題目でご講演いただきました。

その中で、参加者同士、こんな場合どうする？と考えるケーススタディの時間がありました。課題は3つでした。

1 問め 「危険な戦いごっこをしている。他の遊びに目を向けさせてやめさせたい」

2 問め 「年長なのに読み書きができない。どうやって教えよう」

3 問め 「お手伝いすると言ってくるが、余計な手間と時間がかかって、嬉しくない」

よく耳にする悩みごとです。こちらをごらんの方々は、どのようにお考えでしょうか。

ご講演では、1問めについて、戦いごっこをするのは「かっこいい自分になりたい」という意識があるということで、同じくらいの子どもが全力で向かい合うので、自分と同じ人間がいること、触れると痛い人がいることを知っていく機会にもなりますね、というお話がありました。

2問めについては、教えたあまり「ひらがなドリル」でいきなり文字の練習をするのではなく、言葉遊びなどをしながら、本人が伝えたいと思う時をはかっていたいですね、というお話が出ました。

3問めについては、「説得」「選択」ということを考えてはというお話が出ました。やってほしくないのではないというより時間がないことが大きいと思われるので、「何時までにご飯食べたんだけど、どうしよう」と問うて考えさせるのもいいかもしれませんし、一緒にできるメニューや料理方法(包丁をフードプロセッサーにするなど)を検討するもいいですねというお話でした。

2問めについて、私自身のことですが、小さい頃、父母が新聞を読んでいたならそれを私のがのぞきこみ、「の」の字をみつけては、ここにもある、あそこにもある、と言い出したので、『の』って読むんだよ」と教えると、「これも『の』！、あれも『の』！」と言い出して、覚えて書き始めたということでした。大人が見ている新聞をのぞいて同じ形をみつけて嬉しくなったのがきっかけだったかもしれません。そういえば、「ひらがなドリル」は家で見たことがありませんでした。

ご講演の最後の方では、子どもは、設定された特定の知識や技能などを習得するという形より、主体的に世界や社会に関わったり、他者と相互作用したりするといった経験を通して育つというお話がありました。できるようになってほしいことをそのまま子どもに求めるのではなく、子どもが何かやりたいと思って対象に働きかけていく環境をつくって、その中でできていくようにしていく、というように、親も意識していきたいですね。